

早稲田大学
図書館所蔵

蔵書印譜私稿（七）

大江 令子

凡 例

- 一、本稿は本館所蔵資料に見られる蔵書印を紹介するものである。
- 一、排列は人名（印の使用者名）の五十音順とする。
- 一、印影は原則として原寸大とする。印色は各々の原色を再現するのは困難なため、朱・墨等、近似の色をもって示した。但し、印が資料の文字や罫にかかっている場合はそのまま墨刷りで示し、印の色を注記した。
- 一、必要と思われるものには印文の読みを記した。
- 一、印の使用者の経歴等、簡略な解題を付した。参考文献は一々あげないが、既刊の事典・印譜・評伝等を参照した。
- 一、解題末尾に、印を採集した資料名を添えた。

（おおえ よしこ 図書課特別資料室）

目

市川團十郎(七世)

上田 秋成

内田 五観

小幡 太室

神原 甚造

次

久保 天随

関場不二彦

武島 羽衣

土屋 老平

長野美波留

仲野 安雄

野津 基明

宮川 曼魚

村尾 元融

横山 重



「夜雨」



「市川
正統」

市川 团十郎(七世) (七五—八五)

歌舞伎俳優。寛政二年江戸に生れる。俳名三升、白猿、夜雨庵、寿海老人等。一〇歳で团十郎を襲名、二三歳で座頭となり、化政期から幕末に至るまで活躍した。小柄ながら口跡にすぐれ、市川家代々の芸たる荒事はもとより世話物・所作事など広汎な芸域をよくした。天保三年、初世以来の当たり役を調べ、「歌舞伎十八番」を制定した他、四世鶴屋南北と結んで市民生活を活写した「生世話物」を創案するなど多くの業績を遺した。天保一三年その豪華な生活が水野忠邦の改革令にふれ、江戸十里四方追放に処せられ、七年にわたり諸国を巡演、全国にその名を知らしめた。俳句・狂歌をよくし合巻の著も多い。安政六年没。

『みすちの水くさ』市川团十郎(七世)自筆

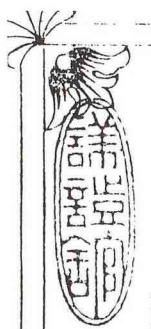


「昨非庵
藏書記」

上田 秋成（一七四一—一八〇九）

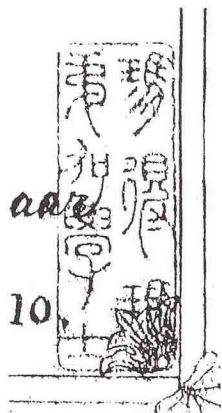
国学者、読本作者、歌人。享保一九年大坂曾根崎生まれとつたえる。本名東作、秋成は字。別号無腸、余斎、三余斎、和訳太郎、鶉居等多数。四歳のとき大坂堂島の紙油商上田家の養子となる。はやくに俳諧や和歌に親しみ、明和三年、浮世草子『諸道聴耳世間猿』を、翌年同じく『世間妾形氣』を出版した。安永五年大坂尼ヶ崎に医を開業、怪談小説集『雨月物語』を刊行した。失明等の不運に見舞われながらも、古典研究を深め、読本『春雨物語』、随筆『胆大小心録』、煎茶道の書『清風瑣言』など多方面にわたって著作を遺した。文化六年没。

『曲江書屋左伝快読』乾隆五四年序刊



(朱印)

「詳證館」



(朱印)

「瑪得瑪
弟加學士」

内田 五観 (一八〇一—一八八三)

和算家。文化二年江戸に生れる。初名恭、のちに観または五観。通称弥太郎。観斎、宇宙堂等と号した。本姓宮野、のち御家人内田氏の養子となった。一一歳で関流の日下誠に数学を学び、一八歳で皆伝を受けた。高野長英に兵学を学ぶ一方、蘭学にも関心をよせ、私塾を馬得馬弟加(マテマテカ)塾、あるいは詳證館と称した。測量にもすぐれ、嘉永年間、江川太郎左衛門が伊豆・相模の測量をおこなった際その下でおいに貢献した。維新後は文部省に出仕、明治五年太陰暦から太陽暦への改暦に尽力、度量衡の単位制定にも関与した。著書に『古今算鑑』がある。明治一五年没。

掲出印の他、「観斎圖書」の印が知られている。

『蘭語訳撰』文化七年序刊



小幡 太室（生没年未詳）

江戸中期の医家、国学者。京都の人。名は文華、字は君英、通称杏仙（吉仙とも）。龍草廬に折衷学を学んで詩をよくした。編著書に『草廬集』『太室集初編』がある。

『還魂紙料』写本



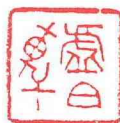
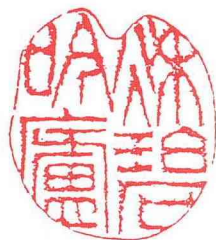
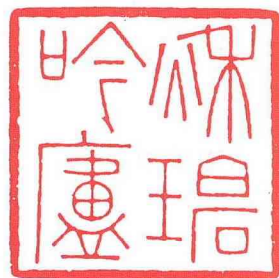
〔洛住判
事神原
甚持本〕

神原 甚造 (二八四—二九四)

法律家。香川大学初代学長。明治一七年香川県多度津に生れる。京都帝国大学に法律を学び、判事として京都、大阪、神戸等に奉職、大審院部長をつとめた。昭和二五年香川大学初代学長に迎えられ、同大の基礎作りに尽力した。同二九年没。

没後その蔵書は香川大学に寄贈され、附属図書館に「神原文庫」として収蔵、目録も刊行されている。内容は広汎にわたり、洋学、錦絵、古文書、雑誌の創刊号等等特色とする。平成七年には「神原文庫洋学資料展 啓蒙の源流」が開催された。なお、本館所蔵の大黒屋光太夫旧蔵『露国民学校用算術入門書』にも「神原家図書記」の印が見られる。

『上新請求経等目録表』写本

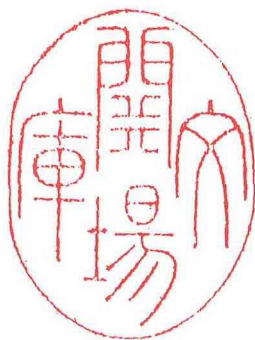


久保 天隨 (一八七五—一九三四)

漢詩人、漢文学者。明治八年東京下谷に生れる。名は得二。はじめ春琴、のち天隨と号す。別号に兜城山人、虚白軒、秋碧吟廬主人等。東京帝国大学漢文科・同大学院に学び、在学中より雑誌「帝国文学」に漢詩や紀行文を発表。卒業後、法政大学講師、宮内省図書寮編修官等をつとめ、昭和四年、台北帝国大学開設とともに教授となった。『秋碧吟廬詩抄』等多くの漢詩集の他、漢詩の評釈、歴史書等多数著した。昭和九年台北に没した。

現在、台湾大学図書館に天隨の没後収蔵された旧蔵書約七千冊が保存されている他、本館には平成二年子息亮五氏より寄贈された、天隨の自筆稿本、校訂本、印譜、編著書等を架蔵している。蔵書印として使われた印は三〇余を数えるが、ここにはその一部を掲出した。

久保天隨旧蔵諸本



関場 不二彦 (一八六五—一九三九)

外科医、歴史学者。慶応元年会津若松市に生れる。理堂と号す。明治二二年帝国大学医科大学を卒業、二五年札幌病院院長となった。翌年北海病院（のち北辰病院と改称）開設。日本医師会顧問他の要職を歴任した。著書に『あいぬ医事談』『西医学東漸史話』『徳川時代の蘭学者を追懐す』等がある。昭和一四年没。同四一年生誕百年を記念し『関場理堂選集』が編まれた。

Lexicon latino-belgicum novum,

olimidiomate Gallico publicatum, 1725.



武島 羽衣 (一八七—一九七)

詩人、歌人、国文学者。明治五年東京日本橋の木綿問屋に生れる。本名又次郎。第一高等学校から東京帝大文科大学国文科に学ぶ。雑誌「帝国文学」創刊にあたり編集委員となり、詩藻欄に発表した『小夜砧』が高山樗牛の絶賛を得、一躍詩壇に名をはせた。詩風は古典主義的傾向をしめし、大学派（または赤門派）と称された。卒業後東京音楽学校に教鞭をとり、四三年から昭和三六年まで日本女子大学の教授として五〇余年にわたって国文学を講じた。御歌所寄人をつとめ、歌集に『美しき道』がある。『美文韻文 花紅葉』『賀茂真淵』『国歌評釈』など著書多数。昭和四二年没。

『四十二物争』写本



「うたのやにをさむ
るふみらのしるし」

土屋 老平 (一八四一—一八八七)

国学者、郷土史家。天保一二年上野国高崎藩の国学者
武居世平の二男に生れ、土屋氏を嗣いだ。通称補三郎、
号和堂、歌の屋、俳名を多胡石文といった。橘冬照、橘
本直香に国典を学び、和歌文章に秀で地誌に通じ、高崎
藩侯にかかえられた。著書に『倉賀野志』『片岡郡志』
『高崎旧事記』『上野古碑集説』等がある。明治一〇年
没。

『癩癩談』文政五年刊



「麻生
園」

長野 美波留（二七五—一八三）

国学者。信濃埴科郡松代の人。安永四年生れ。通称七郎、別名三晴、麻生園と号した。江戸に出て大村光枝に歌学を学び、のち塙保己一の門に入り、国典を修めた。和学講談所に出仕し該博をもつてきこえた。著書は『めさまし草』『百人一首抄』『徴古図録』『対照仮字格』『万葉集類句』『県居雜録標注』等多数。文政五年没。

『祭主輔親判歌合』写本



仲野 安雄 (二六四—二七八)

淡路三原郡伊加利村の里長。元禄七年生れ。諱は近義、幼名慶之介、通称安雄または広助、号を脩竹廬、宜々叟と称した。初め儒を学び、のち神道の奥義をきわめ、若くして藩命により網長浦の郷長となり、九年のち帰村、父を継ぎ伊加利村の里正を四九年にわたってつとめた。その村治の功績等により苗字帯刀を許された。海防の重要性に鑑み諸国の海辺を視察し、国禁を犯し朝鮮、琉球にまで渡った。著書『淡路常磐草』他多数。安永七年没。

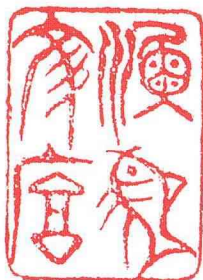
『和字大観鈔』宝暦四年刊



野津 基明 (一八三—一八七)

国学者。享和三年近江彦根に生れる。通称藤次郎、文内、豊、字は亀齡、亀舎と号した。近江藩士として御竹奉行、足輕辻著到附役等をつとめた後、慶応元年弘道館軍学世話方を、明治元年礼節御用掛を拝命した。土御門晴親に易を学び、狂歌もよくした。著書に『桑華銘彙』『彦根纏記』『彦根歌人伝』等がある。明治九年没。

『仏足石碑銘』宝暦二年刊



宮川 曼魚 (一八六一—一九五七)

随筆家。本名渡辺兼次郎。東京日本橋の鰻屋「喜代川」に生れる。のち深川の鰻屋「宮川」をついだ。家業のかたわら江戸文学に親しみ、『江戸売笑記』『花鳥風月』『深川のうなぎ』等の随筆を著した。江戸俗曲の解説、小唄の作詞でも知られた。昭和三二年没。

本館には昭和三二年曼魚自身より洒落本六一冊が寄贈されている。

宮川曼魚旧蔵洒落本諸本

『万の文反古』正徳二年刊



〔村尾氏
圖書記〕



〔松蔭
書屋
珍蔵〕

村尾 元融 (一八〇五—一八五三)

考証学者。文化二年、遠江浜松に藩医董寛の子として生れる。字は彦明、通称は良治、善四郎。松蔭野史、環水と号す。はやくに藩医久保寿軒に学んだが、文政三年一七歳で江戸の朝川善庵に入門。のち蔵書家として知られた伊賀守新見正路に仕え、その「賜蘆文庫」の資料を駆使し大著『続日本紀考証』を著わした他、『続紀索引』

『続日本紀逸文』等の編纂にあたった。正路没後ふたたび浜松藩井上侯に仕え、『続日本紀考証』上梓を企図したが、果さぬまま嘉永五年に没した。元融の遺志を継ぎ、明治三年息元矩らにより『続日本紀考証』が刊行された。掲出印を採集した図書は、いずれも明治三八年、元融の孫村尾元長氏より寄贈されたものである。

『類聚三代格』村尾元融自筆

『賜蘆書院蔵書目録』同自筆

赤木文庫

重

重

ふくしま

横山

横山

赤木文庫

アキキ

横山重

赤木山

横山家藏

横山

横山重

ふくしま

横山 重 (一八六〇—一九〇〇)

国文学者。明治二九年長野県東筑摩郡片丘村に生れる。松本中学へ入学、広丘尋常高等小学校長として赴任した島本赤彦を知る。大正三年、上京し雑誌「アララギ」の編集に加わる。慶応義塾大学文学部へ進み、一一年卒業、一三年より三年間母校で教鞭をとった。古典籍の翻刻をライフワークとし、『神道集』『室町時代物語集』『古浄瑠璃集』『琉球史料叢書』等多数のテキストを刊行した。この校訂事業のために、底本とすべきすぐれた典籍を収集、その蔵書「赤木文庫」は斯界有数のコレクションとして知られた。著書に自身の書物収集について赤裸に語った『書物搜索』がある。昭和五五年没。

本館では昭和五六年より五八年にかけ、仮名草子、浮世草子、俳書等を中心とする赤木文庫本約百部を収蔵した。

旧赤木文庫諸本

